マスター to アーティスト

【第11回】

＜深奥なる世界のとば口＞

松波千津子 音楽学部　演奏学科 声楽コース　教授

（まつなみ　ちづこ）

岐阜県生まれ。
1982年　愛知県立芸術大学音楽学部声楽専攻卒業
1984年　愛知県立芸術大学音楽研究科声楽専攻修了
1984年　第53回日本音楽コンクール 声楽部門第3位入賞(1位なし)
1987年　岐阜県音楽活動特別奨励賞受賞
1987年　文化庁国内芸術家研修員修了
1999年　岐阜県芸術文化奨励賞受賞
2001年　名古屋市芸術奨励賞受賞

名古屋オペラ協会会員（副委員長）
日本発声指導者協会会員
CBCクラブ会員

華のある人だ。居るだけで、部屋がパッと明るくなるような華やかさがある。数多ある音楽の中でもとりわけ華やかなオペラの世界、その舞台上で主役を演じてきたことを鑑みれば当然ではある。しかも、温柔な人柄を偲ばせる、気さくな、くだけた話し振りに誰しもすぐ好感を抱いてしまうことだろう。音楽の師としてだけではなく、それ以上に親しみを感じ慕う学生も数多いに違いない。飾り気のない物言いは、確固たる自信に裏打ちされたもの、と考え始めたところで、口を突いて出てきた言葉は少し意外なものだった。

「今になってようやく、声楽という奥深い世界の入口に立った気がするんです」

これまで、叙情的に情感を歌い上げるリリック・ソプラノを自認し、そういった楽曲をレパートリーとしてきた。それ以外のものを演じるなど考えたこともなかった。ところが昨年、モーツァルトの「魔笛」、「夜の女王」をと求められた。オペラファンにはよく知られるところだが、その役柄には「夜の女王のアリア」といわれる2曲の難曲がある。その2曲は、どちらもソプラノの中でも最高音域を使うコロラトゥーラで歌うものである。とりわけ2曲目の「復讐の炎は地獄のように我が心に燃え」は、超絶技巧が駆使される難曲中の難曲として知られ、夜の女王はヒロインの母親役にも係わらず、若手ソプラノの登竜門の役柄となっている。コロラトゥーラは、リリック・ソプラノの自分では出したことのない音域、もちろん歌ったことはない。役を引き受けることを断った。しかし、夜の女王の、娘を思う母親としての立場と、娘を顧みず復讐に心を燃やす壮絶な場面の2面性を、若手の歌手では表現しきれないと三顧の礼を尽くして頼まれてしまう。

そこから猛練習が始まった。楽曲中の最高音「3点F」を、自分のものにするために。「根性で出したのでは駄目なんです。次の日、声が出なくなるのでは困るわけです。純粋に技術として、声帯を薄く伸ばし、呼気をコントロールして練習するんです。すると、出るんですよ！　訓練って凄いなって（笑）」　改めて感じ入ったという。

「声楽は3つの要素から成り立っているのです。自分の体を楽器とするわけですから基礎になるのは体力ですね。それに楽曲を理解する力。それから、理解したことを表現する力ですね。これらが、年齢を重ねることによって、バランスよく磨かれるものなのだとつくづく感じました。経験を重

「天守物語」1999年　愛知県芸術劇場 大ホール
（名古屋オペラ協会、名古屋市芸術奨励賞 受賞）

「春琴抄」1993年　愛知県芸術劇場 大ホール
（愛知芸術文化センター 開館記念、オペラ協会創立10周年記念公演）

「電話」1996年　しらかわホール
（しらかわホール主催：松波千津子スペシャルコンサート）

「松波千津子 ソプラノリサイタル」2003年　しらかわホール
（平成13年度 名古屋市芸術奨励賞 受賞記念）

1984年から名古屋オペラ協会会員、2006年同協会副委員長を務める。オペラ「フィガロの結婚」のスザンナ役でデビュー、「蝶々夫人」「コシ・ファン・トゥッテ」「ドン・ジョヴァンニ」「魔笛」「椿姫」「道化師」「唐人お吉」「春琴抄」「夕鶴」「天守物語」、オペレッタ「メリーウィドウ」「こうもり」等、数多くの主役を好演し、好評を得る。NHK・FMやTV、ソロリサイタル、宗教曲のソリストとして多数出演するだけでなく、中国、アメリカ、ブラジル、韓国などの友好親善演奏会に招聘されるなど、国内外にて活躍。

「道化師」2008年　長久手町文化の家 森のホール

「蝶々夫人」1993年　愛知県芸術劇場 大ホール
（日生劇場 主催）

ねてきたからこそできることだと。だから、まだ、私は、ようやく入口に立てたところ……」

夜の女王に挑戦したこと、自分でできないと思っていたことをやり遂げたことを「ドキドキする」と子供のような好奇心いっぱいの瞳で語った。さらにもう一度、挑戦者になりたいと、今度は、おなじくコロラトゥーラの難曲、「ランメルモールのルチア」（政略結婚で引き裂かれた恋人たちの悲劇。正気を失ったヒロインがフルートとの掛け合いで延々と歌う「狂乱の場」が見どころ）にチャレンジするという。

挑戦を続けることと、それを支えるモチベーションについて訊いてみると、子供のように無邪気だった瞳は、真摯なものへと色を変えた。「私が、これまで色々なチャンスをいただけたことは、周りの人たちのおかげだと思うのです。支えてくれた両親をはじめ、色々なことを教えてくださる先輩がいます。どうして、いつまでも活き活きとしていられるのか、今でも、先輩たちに尋ねることがあるんですよ。そんな素敵な大人たちが、支えてくれる人たちが、いつも私の周りにいてくれたんです。私もそんなふうになれるように、まだまだ成長しなくてはいけないんです。どこまでいけるかわからないけど、歌わせていただける限り、成長を続けますよ」　鼓舞するような、決意するような強い口調で語る。

これまで、「蝶々夫人」「春琴抄」「天守物語」等々、数々の日本的なテーマのオペラも演じてきた。そうするなかで、歌舞伎にも大きな興味が沸いてきたという。「学生たちに、日本の伝統芸能にも触れさせようと一緒に観に行ったのです。オペラにも絶対に役立つと思うからです。役者も演奏の方たちも、呼吸の間合いといい、立ち振る舞いといい、本当に素晴らしいですよね。衣装は目にも楽しいですし。じつは、『修善寺物語』（作：清水修）を演ったときに、歌舞伎の演出家の方にオペラの演出をしていただいたんですけど、オペラとまったく同じなんです。歌舞伎の台詞の抑揚って、オペラの歌の表現と同じなんです。舞台での所作も何もかも、オペラに通じるところがあるように思うんです」　歌のこと、衣装のこと、肉体的にも精神的にも健康でいること、美味しいもののこと、生きること…。話題はとどまるところを知らず縦横無尽に広がる。そして、そのすべてはオペラの世界に通じている。溢れ出るようなオーラに、いつしか話を聞くこちらまで気力が充実してくるような気がした。